

まめのちはれ

霽月

「明日は遠足です。晴れたら稲佐山、雨が降ったら延期です。おやつは五百円まで。体調を整えてきてくださいね」

ざわざわする教室内に、先生の声が響く。チャイムを合図にクラスメイトは次々に教室から出

ていく。

「明日晴れるといいね」

「てるてる坊主飾るね！」

友達三人とやり取りをしながら、帰路に着く。わくわくしている声をよそ目に「山登りか。苦手だな」と心の中でボソリと呟く。

駄菓子屋に寄り道して、おやつを買って家へ帰る。遠足の準備を着々と進めると、リュックがず

つしりと重たくなってきた。

準備も終わり、寝る前に天気予報をつけた。

「明日の長崎のお天気は『まめのちはれ』でしよう」

今、豆って言った？ 聞き間違いかな？ 豆が降ってきたら、遠足はどうなるんだろう？ でも豆が降るわけないか。そう考えながら眠りにつく。

翌朝、地面には大量の豆が落ちていた。大豆、

枝豆、インゲンマメ。近所の人は、外に出て口々に「豆が降った。なにごとだ」と言っている。昨日の天気予報は当たったのだ。教室の横のベランダやグラウンド、通学路も豆でいっぱいだった。いろいろな種類の豆で埋め尽くされた学校は、いつもよりカラフルだった。

先生が教室に入ってきて「今日は遠足決行します」と声が響く。豆が降ったら遠足はあるのか、と

新しい発見と登山の憂鬱さが入り交じる。

「稲佐山でみんなで豆を使つて大きなアートを作
りましょう。素敵な思い出になりますよ」と先生
の声が響く。

みんなは「え？」とびっくりする。続けて先生は
「豆が降つたことには、きつと意味があるのです
よ」と言う。

みんなは楽しく豆を拾いながら山を登る。「な

んでみんな楽しそうなの」と思いながら私も渋々豆を拾う。しかし、豆を拾うと、一つ一つ違う豆の形がおもしろくなってきた。

「これでどんな作品ができるんだろう」
見上げた空は、綺麗な青空だった。

まめ不思議

木村 加世子

コロコロ、コロロン……

「あれ？ おばあちゃん、白いお豆が一つ落っこちたよ」

「おやそうかい？ 気付かなかつたよ、そりや大変だ」

「おばあちゃんは毎日、その白いお豆を飲んでるよね」

「そうだよ、これを飲んでないと具合が悪くなっちゃうからね」

「その白いお豆を飲むと元気になるの？」

「そうだよ、飲むと楽になって元気になってやる気も出る不思議なお豆なんだ」

「私も飲んだら、もつと元気になる？」

「あははは、あんたは具合いの悪い所がないから飲んでダメだよ」

そう話していたおばあちゃんは毎月、白いお城みたいな魔法使いの館に通っては、不思議な白いお豆をもらってきて飲んでいた。私が子供の頃、おばあちゃんは魔法使いと友達で、飲むと元気になるお豆の他にも『飲むと食欲が出る不思議な白砂糖』『塗るとお肌がきれいに治る寒天ゼリー』

『貼ると体の痛みが和らぐシール』『吸うと呼吸が楽になる不思議なスプレー』と、色んな不思議アイテムをもらってきていた。私は子供なりに考えて、魔法使いの館には秘密の畑や工場があつて、そこでは魔法使いが飼っているカラス・ネズミ・イヌ・ネコ・カエルといった使い魔たちが、不思議なお豆を育てたり、不思議アイテムを作つていたりと思つていた。だから私も、おばあちゃんのだ

めに自宅の庭で育てようと、白いお豆を土に蒔いて母から叱られた記憶がある。今では笑い話だけれど。白い魔法使いの館や、魔法使いがくれる不思議な白いお豆の話は、おばあちゃんからいつも聞かされていたことだけど、今思えばあらゆる病気を患っていたおばあちゃんが、私に心配させまいと作った不思議ワールドだったと後で気づいた。そんな私も成長して、今は薬剤師という魔法

使いになって、私のいる魔法の館を訪れる病気やケガで苦しむ多くの人たちに、様々な色や形をした不思議なお豆や魔法アイテムを、一日も早く治りますようにと願いを込めて手渡している。